

職務についてもっとはっきり示すべき事を要求されている。セールスマンが、自分の扱っている品物をよく知っている如く、教会の一員としてこの世にある信徒は、教会とは本来何かと言う事を、充分に知るべく教育されたいのである。

6. 礼拝復興と正教会

(著者は、聖ブラデミール正教会神学校の、教会史及び礼拝学教授の、アレクサンダー・ジエマン司祭である。)

西方教会のリタージカル・ムーヴメントは、東方教会では歴史的に当然の事とされているような幾つかの原理、原則の再発見と言える。その第1は、礼拝の共同性、全体性と言う事であろう。聖餐式に於ける最も重要な契機は何か、という問いに対して、答えは、聖餐式全体であると言われねばならない。聖餐式は全体として、教会形成の過程であり、それ故最終的には、神の国への旅行なのである。聖餐式に於ける感謝と喜びの性格は、本来、復活の喜びの集りとして甦りの主と逢い、主と共に神の国に入る事から来ている。こうして、聖餐式は、我々を奉献するという方向、即ち、神へと向う過程と、次には、聖別を転機としての逆の方向、神から人間へ、神御自身を我々の生命のために与えられる方向とをもつ。クリスチャンは更に「平安のうちに去るべし」との宣教へのつとめをうけて、更に世界へと向ってゆく。こうして、聖餐式は、その繰り返しによって、我々を漸次に、キリストの成員へとつくりかえてゆくのであり、最後に、聖餐の sacrament は、終末的な意味における、バルウシアの sacrament として、キリストと共に、神の国にある様相をもつのである。リタージカル・ムーヴメントの主要な務めの一つは聖餐における、この終的意義を再発見する事にあるであろう。

最後に、インデアナポリス主教、ジョン・P・クレイン師父の、「聖餐による生活」と題する説教があるが、評する事を避けて、以上六つの収められた論文、或は講演を概括すると、本来、礼拝復興のための会議であるので、勿論、聖餐式中心の意義の昂揚に集中している。六つの主題はしかし乍ら、ある限られた時間や紙数の制限の中で語られるには、あまりに大きな課題と思われる。また、これは、聖公会の中で行なわれたリタージカル・ムーヴメントの会議であるから、第六のそれを除くと夫々の論文の背景に、聖餐式についての、聖公会としての歴史的な共通理解と、同時に亦問題とが前提されている事を忘れてはならない。私見をつけ加えるなら、第3及び第4の論文は、この書物の中で最も示唆に富むものと思う。

(関本 肇)

A. M. Stibbs, Sacrament, Sacrifice and Eucharist :

The Meaning, Function and Use of the Lord's Supper,

The Tyndale Press, London, 1961, 93 pp.

この本の題名より我々は著者が聖公会の人ではないか、と推論するものであるが、果してその通りである。スティブスはロンドンのオークヒル神学院の副校長である。この中で

彼は聖餐式の意義につき様々の角度より論義を展開する。しかし彼の論義の中には特に目新しいものは見られない。其の事は決してこの本の価値を減ずるものでない。我々はこの書中で、一人の真実な敬虔な信仰者が聖餐について自らの確信を卒直にのべている姿に出会うのである。長い教会の伝統のない我々日本の教会では、聖餐の本質について論議されることが少い。それ故、この書を通じ、我々の信仰の中心としての聖餐につき、種々教えられるのである。

この書の内容を述べる前に、次の様な事項を前置きとしたい。本年の1月24日(日)午後3時半より、神戸ユニオン・チャーチで意義深い礼拝が行われた。これは神戸地区の超教派的研究会である Ecumenical Study Fellowship が主催をした祈祷礼拝ともいうべきものであった。これにはプロテスタント諸教派の教職、信徒、カトリック教会の教職、信徒合計約100名が参加した。そして、中山手カトリック教会のピエトロ・ベレッティ博士が説教をし、日本基督教団兵庫教区宣教師アーサー・ギャンプリン牧師が司式した。ベレッティ博士は、イタリヤ訛りの、しかし大変判り易い英語で流暢に説教された。「教会の一致」という主題であった。我々プロテスタント信者にとって、教会の二大標識ともいうべきものは御言葉の宣教と、聖礼典の執行である。この中の一つをカトリック教会の司祭が行ったということは、まことに意味深い事であった。これに参加した人々は、ベレッティ博士が指摘されたように「複雑な思い」で彼の説教に耳を傾けていたに違いない。ところが、もしベレッティ師が説教をする代りに聖餐式を執行するという事になったら一体どうであったろうか。御言の宣教は聖礼典の執行と密接不可分の関係にある。一方が主であり、他方が従であるというものではない。しかし、御言の宣教が行われる条件と、聖餐式が行われうる条件とは、必ずしも同一でない事がおこり得る。特に教会間の交りにおいてはしばしばそうであろう。しかし何れにもせよ、この様な合同礼拝が行われたことは、今後のローマ・カトリック教会、正教会、プロテスタント教会の協調への第一歩となることであろう。聖餐式が共に守られる日は遠い先であるかもしれないが、道は開かれたともいえるであろう。相異なる教会間で互に理解を深め、協調への足がかりを見出すため、最近、教会制度、説教、礼典などに関する出版物の数が多くなりつつあることは歓迎すべき傾向であろう。

また同じく本年1月25日スペインのマドリッドでローマ・カトリック教会とプロテスタント教会が合同礼拝を守り、マルセロ大主教の説教がなされた、と報ぜられている(基督教新報第3450号、第3頁)。

以上の事実は世界教会運動の中において「御言の宣教」がどの様な形をとりつつあるかを示してくれると思う。

それと同時に、多くのキリスト信者にとっては、共同陪餐(intercommunion)が問題となりつつある。

前置きが長くなりすぎたが、スティブスの著書は、共同陪餐(intercommunion)の問題につき一つの光を投げかけるものである。スティブスは聖礼典につき既に二つの論文を公にしている。

Stibbs, A. M., *The Lord's Supper* (C. P. A. S. Falcon Booklet, 1960)

Stibbs, A. M., *The Meaning of the Word 'Blood' in Scripture* (Tyndale Press, 2nd Ed. 1954)

此処に我々が紹介する著書は聖公会の人々のために書かれた啓蒙的著作である。しかし著者は同時にプロテスタントの人々に対しても自己の所信を訴えたいと願っている。この著の動機は、英国教会内の祈禱書改訂の動きである。著者はこの著書中で問題点を明らかにし、この祈禱書制定満300年の意義を強調している。現行祈禱書中、特に聖礼典に関する条項につき、著者は聖書的、福音的立場より自己の見解を表明し、クランマの意図を新しい時代から再解釈しつつ、祈禱書が改訂されるなら、どのような事項こそ問題とされるべきかを示そうとする。

本来ならばこの著書の各章にわたって略述されるべきであろうが、便宜上著者の主張点を列挙し、最後に批評を加えようと思う。

この書において第一に指摘されるのは「犠牲」(sacrifice)の問題である。トレント会議において、「聖餐とは、祭司が生者と死者のために奉獻する贖罪的犠牲である」と定められたことを著者はとりあげる(11頁)。この結果、一方では聖餐を祭司が神に奉獻する贖罪的犠牲とみなす傾向、他方では上記見解に反対し、贖罪的犠牲は、キリストが十字架の上において、只一回限り自らを捧げ給うただけであって、夫以外にはいかなるものといえども、罪をあがなうことは出来ない。聖餐は、人より神に向う運動(Godward movement)ではなく、神より人に向けられた運動(a movement manwards)であり、これによってキリストの死が解明に我々の心に写され、陪餐者は聖餐を通じ、永続的なキリストの恩恵にあづかる、と理解する立場(11頁)が常に持続されていることを語る。

そして聖餐を我々がささげる犠牲と見なす考え方を排除するため著者は、

第一に犠牲の内容につき、ヘブル9:13, 14, エペソ5:2を基盤として論述し、キリストの犠牲以外には神の喜び給う犠牲が存在しない事を語る。

第二に著者は聖餐についての聖書的、福音的立場を明確にしようとする。そして(1)キリストの犠牲は神との和解の唯一の基盤、(2)キリストの犠牲のみが、我々の罪の赦しの保証、(3)聖書の証言によれば「教会はキリストを神にささげることが出来ない」(29頁)、(4)主の晩餐制定時、キリストの意図は、この様な犠牲をささげてもらう事ではなかった、と著者は論じ、聖餐式に「キリストを献げる」というような考方は非聖書的、非福音的であると論述する。

第三に著者は「人々の罪のための唯一の犠牲はキリストである」という点を強調し、キリストの贖罪的死を代償説の立場から把え(33頁)、このような代償をなしうるものは永遠の神の御子のみであって、夫以外の何人でもない」と論述している。

第四としては、キリストの犠牲は、神の民が決して忘れ去ることのできないもの(39頁)、従って聖餐式において重要において重要なことは *ἀνάμνησις* である(45頁)。しかし、これは単なる記憶を意味するのではなく、「個人的に、現存している諸結果を伴う一々の出来事として(聖餐において)、現在作用している意味を実感し、また経験すること」(45頁)で

ある。従って聖餐式に列するものは、同時に、この主の死を *καταγγέλειν* するのである、と主張する。

第五に著者は、「主の体と血に」あづかる意味に言及し、それは「主の死がもたらす恩恵 (benefits) を享受すること、或は利益 (advantages) をうけることである」(51-52頁)と論述する。この恩恵の内容は「罪の赦し」と「内住するみ霊の賜物」の二つ(55頁)である。

第六の点は聖餐 (eucharist) または聖餐的犠牲 (eucharistic sacrifice) という語によって聖餐式全体を表現することは聖餐の根本意義を損うことになるとし、「主の晩餐の執行 (an administration of the Lord's Supper) に参与する」というべきであると主張する(59頁)。このような主張の背後には最初より述べてきたように、聖餐が人の神に献げる (Godward) 犠牲ではなく、神の人への働きかけ (manward) にあづかる受容的行為であるとする考え方が基本となっている。従って、聖餐にあづかる態度として「感謝をささげる」(eucharist or thanksgiving) ことが非常に大切な点だとのべるのである。

第七の点は、キリストが一回限り、自らを宥めの供物として神にささげられた事により、我々の罪がきよめられ、神のよろこび給う礼拝をささげうる存在とならしめられることである (65-67頁)。従ってキリストの贖罪的犠牲なくしては、我々が神によろこばれる供物として自分自身を献げることが出来ない、というのが著者の主張である。

第八の主張は、聖餐に関して起った二つの誤謬である。(1)は聖別されたパンとぶどう酒の中に、現実のキリストの血と肉とが客観的に存在するという考え方、(2)はこれらの聖別された要素 (elements) をささげることが、祭壇上での神への犠牲だ、とする考え方である。

これに対し、著者は聖餐式において重要なのはパンとぶどう酒という物質、すなわち聖別された要素ではなく、執行される行為そのものであることを指摘する(75頁)。従ってそこにおいては宣言される御言葉や行為が重大な意味をもってくるのは当然である。そして、生ける主キリストは、この聖餐式の行為を通じて我々に来り給うことを主張している。

第九として著者は、聖餐式が執行されるにあたり、過去の伝統に従うにとどまらないで、聖書的に行われるべきことを主張する。そして聖公会の現行聖餐式の様式に対し、次の三点を考慮すべきだ、と主張する。その(1)はクランマの制定した祈祷書において感謝をささげる (thanksgiving) 行為が欠けていること、最初にパンを、つぎに葡萄酒を順次とって、感謝をささげた後分餐すべきだ、と主張する(84頁)。(2)は「これはあなたのために与える私の体である」、「これは多くの人のために流す私の血である」という語を、聖餐式開始時の聖別の言葉から離し、パンとぶどう酒が供与される時の本質的、同時的用語とすべきである(84頁)。(3)は、主が聖餐を制定し給うた時の範例に従い、パンとぶどう酒は別個に供与されるべきであって(84頁)、聖別されたパンのみが供与されるのは、非聖書的、非福音的だ(85頁)とする。

このような聖餐式執行に関する示唆に加え、著者は(1)聖餐式の執行者が必ずしも特定の教職に限られる必要がないこと、(2)共同陪餐 (intercommunion) の問題が、個人個人のキリストに対する人格の関係によって具体的に行われるべきこと、(3)聖餐式執行に当り、説教

が行われるべきこと、(4)聖公会の教会では聖餐テーブルと会衆との間に大きい間隔が設けられているが、この聖餐テーブルは会衆が最も近づきやすい場所、会衆の真中におかれるべきこと(87頁)などを示唆している。

以上がこの書の概略である。今、気付いた点を次ぎに掲げてみると、

(1)聖礼典(sacraments)の数の問題、或は transubstantiation, consubstantiation などの問題に著者は全くふれていない。著者は聖書的、福音的立場を追究しているのであるが、宗教改革者達の聖餐に対する態度に殆んど言及していない事を残念に思う。特に1662年制定のクランマの祈祷書中、聖餐に関する立場に大きい影響を与えたものはカルヴァンであるが、彼について少しも言及されていないのは意外である。

(2)トレント会議の決定事項の中で、特に聖餐の問題を著者はとりあげ、それを出発点として犠牲についての論議を展開している。トレント会議で確認せられたのは transubstantiation であった。聖餐をもって犠牲とするとの決定がトレント会議における聖餐の中心的関心事でなかったのではないだろうか。勿論、著者は聖公会教職の中に、聖餐を神に対する(Godward)犠牲と考える人々がいるという事実を重視し、実際の立場からこの様な論議に出発したことを我々は認めるものである。

(3)現在のローマ・カトリック教会及び正教会においては聖餐がどのように理解されているか、についても全く言及されていないのは残念である。共同陪餐(intercommunion)の問題に対し、より深い洞察を得るためには、そのような面に対する追究が当然なされるべきであろう。

(4)最後に具体的な例として、日本基督教団の式文中、聖餐式に関する部分を眺めてみると、スティブスが指摘している形に非常に近い事を発見する。合同教会としての教団が採用した聖餐式の執行形体は、世界教会運動の中で一つの指標となるのではないだろうか。

(辻中昭一)

H. A. Reinhold, *The Dynamics of Liturgy*, New York, The Macmillan Company, 1961, 146 pp.

現代のキリスト教界における最も著しい現象の一つは、礼拝に対する関心が、かつてないほど高まってきたことである。前世紀の中ごろから最近にかけて、礼拝に関する歴史的、原理的、実践的研究が盛んに行われ、近年においては、礼拝を充実させようとする動きが現実の教会生活を復興する力となり、いわゆるリタージュカル・ムーヴメント(Liturgical movement)として発展している。

本書の著者、H. A. Reinhold は、ローマ教会においてこれまで長きに亘りリタージュの改革運動につくした代表的人物として知られている。彼はドイツに生れ、司祭に任ぜられ、後にナチスによって故国を追われてアメリカに渡った。また1951年には、リタージュ改革運動への努力と指導力に対する名誉として St. John's University から神学博士の学位を授けられている。これまでに、彼は、リタージュに関連して *Bring the Mass to the People* (1960) という著作といくつかのパンフレットを刊行し、*Commonweal*, *Jubilee*,